考古アラカルト27

中学生の発掘チャレンジ体験

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

遺構検出作業から、遺構の掘下げ・見出しまでいろいろ体験しました。

京都市立中学校の「生き方探求・チャレンジ体験」を引き受けている。学校の教室から離れて、現場で実際の仕事を体験してもらおうというものだ。ある時、「事前に発掘の意味をしっかり教えておかなければ、現場の方が困るのではないか」という話題が出た。もっともな意見で、発掘の意味がわかって体験するとしないでは、えらい違いだ。

しかし、はたと困ってしまった。教えるには、生徒にどう説明すればいいのだろう。しばらくは考えあぐね、まずは生徒の意見を聞くことだと思い、質問をしてみた。「なぜ発掘するのでしょう」と聞いてみると、「昔のことを調べるため」という答えが多かった。なかには「おもしろそうだから」という答えも返って来た。どうも、何か珍しいものが見つかるかもしれないという「宝さがし」の感覚があるようだ。

発掘は「宝さがし」ではないということを知って欲しいと思った。しかし、それを生徒に知らせ、発掘にもルールがあることを伝えたいのだが、方法が見つからず、難しいと思えて仕方なかった。ましてや「層位学」や「型式学」を具体的にわかりやすく教えることは至難の技だと思えた。

どうすればいいのだろうと考えたあげく、とりあえず層位を示す教材を作ることにした。色違いの箱を重ねて、箱の中には様々な物を入れ、それを土層に見立てて土の順番と出土遺物の関係を教えることにした。

「一番上の箱が土の順番からすれば、次の箱より新しいでしょう。発掘したら箱のなかに物が入っています。この箱の中の物が出土遺物です」と説明しはじめた。しかし、進むにしたがい土の順番を基準に、新しいものから掘り下げ、遺構を検出するのだと教えても、

「取り上げるのは、記録をしてからだッ」

「宝探しじゃァないョ…でも、見つかるといいね！！！」

「土の順では、一番上の箱が、下の箱より新しいでしょう」

中身を出して「この箱の中から出てきたのが、出土遺物です」

なかなか理解が進まない。キョトンとしている生徒もいる。「わかったか」と聞くと無言。ひたすら「発掘は宝さがしではない」と繰り返し言っていた。

教え方が悪いのだろうかと悩んでしまった。気持ちがはやって、「掘れば出る」という体験だけに終わるのではないかとあせってしまった。「宝さがし」になって、一歩間違えれば盗掘と変わらない。両刃の剣になりかねないとも思った。

いよいよ発掘になった。生徒は手ガリで遺構検出をやり始めた。少しずつ剥ぐように土を削るのだが、つい土器片に目が行ってしまう。目的は「遺構を検出することだ」と言っても、土器をとりあげてしまう生徒がいる。現場の調査員もイライラしている。「取り上げるのは、記録をしてからだ」と言ってもわからない。

土を順番通りに掘ることを教えるのは、いかに難しいことか。大人の認識もこれに関しては、たいして変わらないようだ。発掘に参加すれば、おもしろいものが見つかるという意識だ。「小判が出て来ますか」という質問もよくある。発掘には記録がともなうことも知っている人は少ない。発掘のルールを理解するには、どうも手間と時間がかかりそうだ。

ある時、発掘現場に先生が訪ねてきた。「何かおもしろいものが出るか」と生徒に尋ねた。生徒は何気なく「先生、宝さがしではないよ」と答えてくれた。どこまでわかっていたのか、にわかに信じがたかったが、その時のその言葉は大変うれしかった。ほっとした。

一度は、土器さえ出ればそれで良いと私自身が諦めかけた。しかし、「先生、宝さがしではないよ」この言葉を信じ、再度がんばろうと思い直した。

この生徒たちが将来の考古学を背負って行く。教材の善し悪しも影響するだろう。教え方の問題もあるだろう。しかし、これからは、生徒に向かい合っての試行錯誤のチャレンジだ。次回は、わかりやすく発掘の手順を紙芝居の手法で教えて行こうと思う。すでに小道具の用意もできた。未来の考古学を夢みて、チャレンジ体験はまだまだ続く。我慢強くしぶとくやって行こう。

（永田　信一）